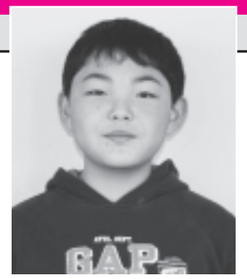
小学生高学年の部　最優秀賞

微生物が地球をつくった



佐々木　悠（ゆう）さん
（志津川小学校５年）

このごろの地球は、変になっているのかなと思うことがたくさんあります。

まず、台風です。巨大台風が次々に南の海から生まれて次々に日本をおそって来ます。

今まで降ったことのないようなものすごい雨がまるで滝のように降って山をくずしたり川をはんらんさせたりしてひがいを大きくしています。

次に地しんです。大きな地しんも次々におこりました。新がた県では二回も続けて起きて、たくさんの人々が今でも、ひなん生活をしています。私達の宮城県でも大地しんがおこることが心配されています。昨夜は南米ペルーで起きた地しんのために日本の太平洋側に津波けいほうがだされました。本当にだいじょうぶなのかなとしんぱいになります。

このかけがえのない地球に何かが起こっているのかと気になっている時に、この本が目につきました。『微生物が地球をつくった』という題名がパッと目にとびこんできました。

微生物が地球をつくった？予想もしませんでした。目に見えない小さい小さい生物がどのようにして、この大きな地球をつくりだしたのだろうか、ワクワクしながらわかりやすく書かれたイラストをたよりに、ちょっとむずかしい本をがんばって読み続けました。

読み終わった直後の感想はすごくびっくりしました。意外なことが次々とわかりました。

およそ四十六億年、たくさんのいん石がしょうとつしてマグマ状態の地球が誕生したことは、ぼくも大体は知っていましたが、そのあとです。原始の海ができ、宇宙からふりそそぐ宇宙線や紫外線、火山の熱や雷などのエネルギーによって生物のからだをつくるもとになるアミノ酸や核酸などの有機物がつくられて原始の海にとけこんで油滴というものがつくりだされて、その油滴からやがて今の細胞と同じしくみを原始生命体がつくりだされたのがおよそ三十八億年前なのです。

それから光合成をして酸素ガスをだす微生物があらわれたのです。微生物からはじまった長い長い生物の進化の歴史の中で地球上のすべての種類の生き物が生まれたのです。

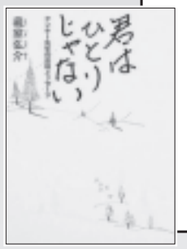
微生物の中には、病気を起こす恐ろしいものもいますが、それはごく一部の種類で、多くの微生物は集団になって、水をきれいにしたり土をつくったり、植物や動物を育てたりして、生物が住みやすい地球をつくるのに役立っているのです。地球誕生という巨大なできごとと微生物誕生という目に見えない小さなできごとが結びついてこの緑の地球ができあがって来たなんて、とても不思議です。この不思議の中にぼくたちも組みこまれているのです。この地球上のあらゆる生物は、原始の昔から二十一世紀のいまでもびみょうなバランスの上になり立っているのです。地球上の生物はどれが大切でどれがいらないものかなど、そんなことは、絶対ないんだと強く感じました。ぼくは、この本を読む前は人間がこの世で一番、えらいんだと思っていましたが、それはまちがいでした。人間も動物も植物も、海も山も川も空もあらゆるものがみんな同じなのです。

人間が自分達さえよければと考えて勝手な事ばかりしているから地球が悲鳴を上げて巨大台風になったり大地震になったりしているのかも知れません。

この地球上にそんざいしているものが、それぞれの立場でそれぞれの役目を果たしていくことがこれからの命をつないでいく上でとても大事なんだなあと強く強く心にきざみこまれました。

書　名…微生物が地球をつくった
著者名…西尾道徳
出版社…農山漁村文化協会

中学生の部　最優秀賞



君はひとりじゃないを読んで

佐々木　珠莉（しゅり）さん
（志津川中学校１年）

「思いっきり、熱く生きよう！」、「イジメはぜったい許さない！」、「『学ぶ』意味をいっしょに考えよう！」等々目次を一読しただけでヤンキー先生の熱い思いが伝わってきます。私は、ヤンキー先生の教室で先生の熱い言葉を、なまで聞いている思いでページをゆっくりめくっていきました。どのページを開いても、

「先生、その通りですね！先生の言ってることは私の心に、まっすぐにとどいています。でも私は、その通りにできません……。」

と思ってしまうのです。どうしてそう思ってしまうのか、私は自分の心を深く見つめたことがないのに気付きました。そのことが私の弱さの一つの原因なのです。

何をするのにも、自信がない。家族のだれかに、確認をしないと安心できない。このごろは、「中学生になったんだから、いちいち聞かなくても、できるでしょ。自分でやってみたら。」と言われることがたびたびあります。でも、やっぱり安心できないのです。

「幼い時から、大事にされすぎてまわりが何でも、手を出しすぎて自分から何もしなくてもいいように育ててしまった。」と家族は言っています が、それにあまえている私がまずそこから脱却しなくてはならないのです。

ヤンキー先生は、「自分は今も震える心を抱えながら、やっとの思いで立っているだけの弱き人間です。哀しくて悔しくて、家で一人涙を流すことだってあります。」と言っています。その先生が自分の弱さを受け入れて、信じるということを得たのです。

「弱くてもいいじゃないか、信じることほど強いものはない。」とも言っています。しかしここのところも私にとって、わからないのです。信じる力とはそれほど強いものなのか実感が持てないのです。さらに先生は「弱くてもいいじゃないか。だれかのかかわりの中で生きてゆくうえで傷つくことからは決して逃げられない。でも、その先で出逢える『ぬくもり』は、信じることでしか得られない安心をあなたにもたらしてくれるはずです。その『ぬくもり』を信じてみませんか。」とも言っていますが、ここのところも私にとってわかりません。こんなにつきつめて考えたことがないからです。私の生活は平和で、おだやかすぎるからかもしれません。自分から、何かをしようとしなくても、毎日が無事に過ぎていきます。教室での勉強も、ソフトテニスの部活も、自分なりにやっています。勉強も格別嫌いでもないし、部活も、苦痛でもないし、特別すぐれてはいないけれど、目に余るほど遅れてもいないと、自分では思っています。つまり、私は現状にあまえているのです。自分から積極的に立ち向かう勇気がないのかもしれません。

私は、また目次をめくって答えを探しました。「失敗したら……と思うとビビっちゃう。」のところを読み返しました。

ヤンキー先生は、「失敗や挫折のない人生なんてあり得ません。失敗を恐れて『転ばぬ先の杖』を親たちが与え続け、転ばぬ教育を先生達はしているのです。『転ばせる教育』をヤンキー先生は必要だ。」と言っています。「失敗したら俺がいる。俺が守ってやるから、安心して失敗すればいい。そう言ってくれています。失敗を恐れて何もしないのではなく、勇気を出して追い求め、失敗したらいい、つまづいたら、そこからやり直せばいい、やり直しは何度でもできる。とも言っています。

強いんだなあとつくづく思います。どうしたら、このように強く考えることができるのかと、私はここでもまた、答えが見つかりません。

この本を何回も読み返し、先生の言っていることを私なりに考えました。そして考えたあげくの結論は、私は中学生になったのに、心はまだまだ成長していないのだ、今の自分に、満足しては、いけないのだ、ということです。より良い中学生になるために、もっと自分を見つめ、ものごとを深く考えて、少しずつでも自分を変えていかなければならないのだと思います。具体的にどうしたらいいのかは、まだわかりません。でも、それを見つける努力はしていきたいと思います。夏休みに読んだこの一冊は、少なくても私にとっては自分をみつめるための「きっかけ」になってくれました。ヤンキー先生に感謝しています。

書　名…君はひとりじゃない
　　ヤンキー先生の直球メッセージ
著者名…義家弘介
出版社…大和出版